

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



大同市大同県にあるカササギの森のマツ。奥には風力発電の風車が立ち並ぶ (李建華さん撮影)

Contents

- 大同の旅 (前半) P 2
- 大同緑化協力 25 年の軌跡 P 3
- 秋のイベント参加者募集 P 4
- あの人の人・新世話人のご紹介 P 6
- 黄土高原紀行< 10 > P 7



GEN 公式サイトリンク

2022.9

207

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク



大同の旅 (前半)

李建華さん (北京同心社文化有限公司 代表)

通訳の手配など長年 GEN の活動を支えてくれた北京同心社の李建華さんがこの夏大同を訪れ、手記を寄せてくれました。李さん大同訪問時の写真や動画は GEN の Facebook、Instagram でも紹介していますのでぜひあわせてご覧ください。



ゼロ感染にこだわる中国、外出の自粛を求められるなか、思い切って家内の楊晶と孫娘の雲起とともに大同に向かった。世界遺産の魅力あふれる雲岡石窟や懸空寺、そして応県木塔がある大同は、ほかでもなく黄土高原緑化事業を25年も続けた高見邦雄さん率いるNGO 緑の地球ネットワークが活躍してきた舞台でもあった。緑化事業の一環としてカササギの森に、長春外国語学校1963年日本語組の同窓たちが2006年に油松を植えたので、その成長ぶりをこの目で確認するのも今度の大同訪問の目的であった。

300キロ近い時速で乗り心地のよい高速鉄道を使い、2時間ちょっとで大同についた。緑の地球ネットワーク協力団が大同を訪れるたびに鈍行やバスに揺られたひと昔前の苦労を思うと、感無量だった。

大同の街にはマスク姿がほとんど見られず、北京と異次元の風景に目を奪われる。「大同はずっと感染者ゼロの状態なんだから」と迎えてくれた魏生

YouTube で配信中
中国駐大阪総領事館の
オンラインセミナー

6月28日、中国駐大阪総領事館主催の「中国を理解する」オンラインセミナーで「中国の黄土高原で緑化協力30年」と題してGENの高見副代表が話をしました。YouTubeの画面から上記タイトルで検索すると出てきます。また、右のQRコードからも入れます。ぜひご覧ください。

学さんが誇らしげに言う。雲起にとって大同は初めてだから、雲岡石窟、北岳恒山に懸空寺、また応県木塔は定番で必見。いずれも千年単位の文化財に目を見張り、いちいち確かめるように見て回った。ニューヨークに5年滞在して米国文化を詰められた頭では、見当がつかないだろう。でも好き嫌いははっきりいう質で、「インフラ環境は中国のほうがいいが、学校はアメリカがいい。せっかくの夏休みなのに宿題がたくさんあっては休みと言えないじゃないか」とぐちっている。

大同パートナーのリーダー武春珍さんに大同の自慢料理をご馳走になった。武さんをはじめ、魏生学、郭宝青、李海静さんとも6年ぶりに再会して懐かしかった。高見さんらの事業が成功できたのは、現地に有能なパートナーがいたからこそだと僕はいつも思っていた。



白登訓練センターで魏生学さんと一緒に

まさに「国際協力の成否は、双方がどのような信頼関係を築けるかにかかっている」という、高見さんの言葉の通りである。「高見さんの環境改善にこだわる姿勢に敬意を抱くほかない」と武さんがいうが、『雁棲塞北』に記録されたかつての苦労話では、武さんらの理解と支持そして努力が絶大なものだった。

白登訓練センター(元の緑の地球環境センター)を訪れた。2011年の春に平旺センターから移ってきたのだが、移植した樹木はなんら影響なしに元気に育っている。「ここに植えた樹木は林業局に登録されたので、勝手に切っちゃいけません」と郭さんが言った。魏さんがこの8月から大同市総工会の機関に移籍するので、そのあとをつぐのが郭さんだ。

「私の代わりに羊蝎子^{ヤンシェズ}を食べてきてね」。高見さんから電話で念をおされたので、高見さんもよく行った店「福来羊蝎子」に魏さんは案内してくれた。羊蝎子とは羊の背骨周りの肉を使った鍋料理で、北京でも大変人気があるようだが、確かにおいしいものだった。(後半に続きます)

夏季寄付のご協力ありがとうございます

43件 407,400円のご寄付をいただきました

前号で夏季寄付を呼びかけたところ、たくさんのご寄付をよせていただきましたのでご報告します。

7月15日から8月31日までにお寄せいただいた寄付は407,400円、43件でした。昨年とはほぼ同件数のご寄付をいただき、大変感謝しております。

4月からの累計寄付額は908,648円となり、2022年度の寄付予算460万

円の19%です。張家口市蔚県での緑化協力をはじめとするGENの活動に使わせていただきます。

GENの財政状況は厳しい状況が続いています。ひき続きのご協力をいただくと大変ありがたいです。ご寄付はGENホームページの「応援する」ページからお申込みいただけます。(https://gen-tree.org/support/)

大同緑化協力 25 年の軌跡

地元のベテラン技術者

GENの山西省大同市での25年の緑化協力を振り返り、当時の写真も交えてシリーズでご紹介します。今回で32回目です。(高見邦雄)

大同での緑化協力についてYouTubeで動画を配信しています。#18 地球環境林センター前半・後半、#19 技術協力:立花先生を新たにアップしています。右のQRコードよりアクセスできますのでぜひご覧ください。



経緯は別の機会に譲るとして、1997年秋、侯喜さんが技術顧問として大同事務所に加わりました。大同市林業局で40年働いたベテラン技術者で、古巣の推挙がありました。ラオホウ(老侯)と呼んで親しまいました。

温厚な風貌に似合わず、仕事ぶりは厳格でした。ときに周囲が煙たがります。たとえば大同県采涼山プロジェクトの整地作業。ここまでしなくても私が思うくらい、幅も深さも既定どおりの溝を掘り、その土を下手に積んで土手を作ります。日向斜面(陽坡)にマツを植えるときの秘策であることを、あとになって知りました。それについて私が話しています。https://www.youtube.com/watch?v=uZJNSy5x7ms

(YouTubeで「緑の地球ネットワーク#12」と検索すると出てきます)

実験林場カササギの森も彼の仕事です。経済利益より生態環境優先の自前の林場を作りたいという彼の構想に、日本側ツアー参加者の自分が植えた木の成長ぶりをみたいという声を重ねて、

2001年に出発しました。

国土緑化推進機構の緑の募金の支援をえて管理棟を建てたところ、ラオホウはスチールベッドで寝泊まりして陣頭指揮をとりました。65歳になっていましたから、ラクではなかったと思います。

遠田宏先生(元東北大学植物園長)は学究肌で、叩き上げのラオホウとタイプがちがうんですけど、お互いに敬意をもって仕事をされました。実験林場に結実するラオホウの構想も遠田先生や日本側との交流を通じて生まれたのでしょうか。

遠田先生はなんでも突き詰めて調査研究され、一時期、小老樹に関心を寄せ、何本も伐って年輪を解析し、根を掘って伸び具合をスケッチされていました。小老樹は桑干河沿岸を中心に大面積に植えられたものの、水不足などのため伸び悩んだポプラ(小葉楊)です。

あるとき大同県でこの木を伐っていて、通りかかった農民に見咎められま

した。まずいことになったな、と私は思いましたが、ラオホウは「あんたはなんて名だ?」ときき、「じゃあ、お前の親父は〇〇〇で、母親は△△村から嫁にきただろう」と言って、その場を取めました。大同の農村をよく知っていて、また農村に彼の名が通っていたのです。

立花吉茂先生が「新疆や内蒙古に胡楊というおもしろいポプラがある」と話されたのでそれを伝えたら、「大同にも導入してある」といってそこに案内してくれました。それらの木から種を集めてたくさんの苗木を育てたものです。生き字引とはこういうことなんだと私は感心しました。

地元紙の大同晩報は「大同の緑化に40年尽くした侯喜が日本との協力で第二の青春を送っている」と報じたものです。残念なことに侯喜さんは2006年に亡くなりました。



前列右から2番目が侯喜さん、4番目が遠田先生

多彩的雜類草

前中久行さん (GEN 代表)

◆ウスユキソウ(エーデルワイス)の草原



花と近くの葉が細かい白毛で覆われています。蔚県のメイン道路はこの花の名前から「雪絨花大街」と名付けられ

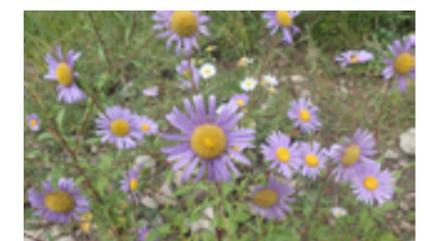
漢字の「雜」の第一義は色々なものが集まっているという意味です。この時期、蔚県近くの山に生育している多彩な草花をいくつかご紹介いたします。

ています。放牧地では家畜が好まないで食べ残されて増えます。



◆ヒゴタイ
九州や東北にも自生がありますが絶滅が危惧されています。日本列島と大

陸が繋がっていたことを示す植物です。◆エゾギク(園芸草花)の野生種



大輪一重の淡青色でたくさんの花が咲ききれいです。

参加者募集

秋のさまざまなイベントを企画しました。みなさまのご参加をお待ちしております。

9月 GEN なんでも勉強会オンライン
里山の保全活動

ー吹田市紫金山公園と東お多福山草原の保全ー



吹田市の紫金山公園と六甲山地の東お多福山草原は、市民による里山保全活動が続けられています。植物生態学の武田義明さんがご専門でこれらの活動に長年関わっておられる武田義明さんにお話をうかがいます。
○日時：9月29日（木）19時～20時30分ごろ
○手段：ウェブ会議システム Zoom
○講師：武田義明さん（神戸大学名誉教授、紫金山みどりの会会長、東お

多福山草原保全・再生研究会会長）
○参加費：無料
○申込み：以下のいずれかの方法でお申込みください。
①9月27日までに件名を「9月オンライン勉強会参加希望」とし、本文にお名前を記入して GEN (gen@gen-tree.org) までメールを送る。
②9月27日までに GEN ホームページの「参加する」ページ (https://gen-tree.org/participate/) より申込み。
③9月28日14時までにイベント管理サイト Peatix (https://gennandemo14.peatix.com/) より申込み。

10月 GEN なんでも勉強会オンライン
ゆりりん愛護会と地域活動



9月のツアーが中止となり、東北を訪問できませんが、オンラインで繋ぎ、ゆりりん愛護会の大橋信彦さんにご報告と地域での活動のお話をうかがいます。
○日時：10月13日（木）19時～20時30分ごろ
○手段：ウェブ会議システム Zoom
○講師：大橋信彦さん（ゆりりん愛護会会長）

○参加費：無料
○申込み：以下のいずれかの方法でお申込みください。
①10月11日までに件名を「10月オンライン勉強会参加希望」とし、本文にお名前を記入して GEN (gen@gen-tree.org) までメールを送る。
②10月11日までに GEN ホームページの「参加する」ページ (https://gen-tree.org/participate/) より申込み。
③10月12日14時までにイベント管理サイト Peatix (https://gennandemo15.peatix.com/) より申込み。

大阪自然史フェスティバルに出展します

大阪自然史フェスティバルは関西の自然保護団体などが活動を紹介し、交流を深める場として続いているイベントです。今年は3年ぶりの対面での開催となり、GEN も出展します。当日お手伝いいただける方を募集しています。興味のある方は GEN までご連絡ください。※コロナの感染状況によっては中止となる場合があります。

○日時：2022年11月19日（土）～20日（日）9時30分～16時30分
○会場：大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪メトロ御堂筋線「長居」駅3号出口より東へ800m）
○主催：認定NPO 法人大阪自然史センター 大阪市立自然史博物館 関西自然保護機構

GEN 自然と親しむ会
秋のきのこを探しに行こう

宝塚市と川西市の市境にある北雲雀きずきの森は面積約28ha、変化に富む地形のなかにさまざまな生物が棲んでいます。この森で見られる秋のキノコを専門家の解説を聞きながら観察してみませんか。ぜひお気軽にご参加ください。

○日時：10月8日（土）10時～15時ごろ
○場所：北雲雀きずきの森
○集合：10時に川西能勢口駅（駅からバスで移動します）
○定員：15名
○案内：栗栖敏浩さん（樹木医、（株）松本微生物研究所）
○参加費：700円（別途バス代（片道220円）がかかります）
○持ち物：歩きやすい服装・靴、弁当、飲み物、数物、雨具、あればきのこ図鑑
○問合せ・申込み：10月5日（水）までにお名前、生年月日、連絡先を GEN までお知らせください。右下の QR コード、ホームページ (https://gen-tree.org/participate/) からもお申込みいただけます。
※小雨決行
※コロナ対策のうえおこないますが、状況により変更・中止の可能性あります。



前回のきのこ観察会のようす

○入場料：無料
○問合せ：大阪自然史フェスティバル事務局（大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪市立自然史博物館内 tel. 06-6697-6262 fax. 06-6697-6225 e-mail: mus-nh.city.osaka.jp）

報告

持続可能な森林管理を

高田 望さん（GEN 世話人）

7月6日、GEN なんでも勉強会オンライン「GENの活動と山の応答ー中国黄土高原を見てー」をおこない、20名が参加しました。講演部分は YouTube で公開しているほか、GEN 会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」で質疑応答部分までご覧いただけます。GEN 公式 YouTube は3ページの QR コードよりアクセスいただけます。

GEN で語られる知見は、基本的にデンキ屋の私にとって常に示唆に富んでいます。今回のご講演はいつもよりさらに印象に残りました。内容の羅列だけの報告では字数を費やすとともに芸がありませんので、いくつかのテーマとその感想を述べることにします。

まず「土壌は単なる土では無い」で始まる土壌構造や表土流失のお話、漠然としていた層構造を整理して説明いただき、すっかり腑に落ちました。思い起こしたのは2011年の紀伊半島大水害による各地の深層崩壊です。一旦あのようにになると、森林の再生までには膨大な時間を要すると理解できました。

次に、苗木造りの外国例のところ登場したマルチキャビティコンテナと専用の道具、「これなら植え付けも楽やな」と思って調べてみたら、日本でも各種開発されており、穴掘りシャベルなどの道具も存在することが分かりました。「人間は道具を造り改良する生物」だと、あらためて実感しました。

また、人の手による伐採と家畜の放牧で植生を変化させ【黄土高原を山に一木もないいまの姿にしてしまったのはやはり人間だったと再確認】とお話がありました。黄土高原では皆さまの長年のご努力で「こうすれば何とかなりそう」という事例を作ることが出



来ましたけれども、地球全体では「人為起源の気候変動が自然界に危険で広範な混乱を引き起こしている：IPCC 報告」とされています。GEN の活動は、気象に最終的にどのような影響を及ぼすのかは分からないにせよ、少なくとも子孫々に「人が住める地球」を残したいためでもあります。

最後に「森林には消防士や救助隊が走り回れる空間を…」と提言されました。霊丘自然植物園の林道は枝を避けるのに一苦労で「これでは緊急事態には間に合わん」と私も感じました。恐らく何度枝払いを実施しても、24時間営業の植物がすぐに繁茂して元の木阿弥なのだろうと思いますが、ツアー再開の暁には主要な任務の一つになりそうです。

報告

対馬のシカ対策に活かしたい、芦生の事例

長郷 美比古さん（GEN 会員）

8月27日、GEN なんでも勉強会オンライン「京大芦生研究林におけるニホンジカによる生態系改変と保全・回復への試み」をおこない、20名が参加しました。講演部分は YouTube で9月末まで公開しているほか、GEN 会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」で質疑応答部分までご覧いただけます。GEN 公式 YouTube は3ページの QR コードよりアクセスいただけます。

最近の頭のもやもやは、シカ、イノシシ被害にあると感じている。どうすべきか。というのも、私たちの20年来的ゲンカイツツジの保護増殖地が荒らされているのである。そこで目にしたのが「ニホンジカによる生態系改変と保全・回復への試み」。渡りに船である。期待は自然に、防鹿網の高さは？ 目合いは？ どのような幅か？ 等々具体的な現場での作業になる。

ところが、それらは枝葉末節、先へ先へと、ずんずん進んでゆく。森と川と海、森と人とのかわり、森の生態系への気づきを深める活動の紹介へと移っていく。そのような多面的、多様な人たちの実践が、50年、100年後の森の回復へとつながっていくのだ。そのように私は理解した。

それでは、この勉強会の成果をどのように生かせるか。3点ある。私の活動に限って記してみたい。

1点は、防鹿網設置による下層植生回復効果についてである。改めて一目瞭然、極めて即効性ある対策と再確認した。最優先で取り組む必要がある。近年、シカ、イノシシ被害が目にあふ。

2点目は、山の恵みをいかに活用するか。持続的な活動の担保には、経済の観点から避けられない。例えば京都の芦生の森では、野生わさびのブランド化の実践が紹介されている。それでは、対馬は大陸型、日本列島型の混在した植物相から成る。その中から、良さそうな植物を販売する道はないか。少し時間はかかるが、年間2万頭を超えるシカ、イノシシ捕獲頭数。自給的に発

想して、肉として自宅の食卓で普通に食べ続けることはできないか。

3点目は、活動をつないでゆく若者の参加に行きつく。これはそれこそ待ったなし。50年、100年は、それほど長い時間ではない。スクラム組んで、前に前に、ということか。



東北海岸林再生活動・
Summer SDGs Festival
for Youth 参加
中止しました

9月3日～4日に予定していた東北海岸林再生活動のツアーは、コロナ感染拡大にともない中止しました。

8月21日に開催を予定していた Sumer SDGs Festival for Youth もコロナ感染拡大にともない出展を見合わせました。



あの人 この人

「あの人この人」では、個性豊かな GEN 会員のあれこれをご紹介します。

支援プロジェクト直の会 代表 土居 止戈代 さん (大阪府)



出合いの輪

緑の地球ネットワークに繋がってから二十数年。宝塚にあった関西日中交流懇談会で少数民族の教育支援をされていた竹田幸子さんに、GEN 事務局の太田さんを紹介していただきました。当時、私は浜松に住み、友人たちと「コーヒー 1 杯 500 円の節約」を合言葉に、主にインド・カンボジア等の学習支援をしていました。

いつだったか、『貧乏物語』で有名

な河上肇の墓参りに、河上先生のお孫さんと竹田さんの 3 人で京都の法然院にご一緒し、先生ご夫妻のお墓と歌碑に合掌。碑には“たどりつき ふりかえりみれば やまかわを こえてはこえて きつものかな”と、先生の見事な万葉がなに見惚れていました。墓参後、四条河原町の有形文化財、フランソアで、店の名画や河上談議に花を咲かせたことが懐かしいです。

今では竹田さんはパーキンソン病に苦しみながらも、医療問題に声をあげ

署名活動をされたり、最近では病を押してもう一度中国の沢山の老朋友に会いに行く計画に、驚愕と刺激を受けております。

テレビ番組「大下容子ワイド! スクランブル」等に出演の、東大の社会学者、阿古智子教授も若いころに竹田さんと同行して農村の実態調査をされていたとか。

2008 年の四川大地震支援ボランティアで親しくなった歌手の李広宏さんは、私の名前「止戈代」に共感。今こそ、世界中のすべての武器(戈)を止めて、人びとが地球人として繋がりを、平和に生きるべき願いを込めて、歌を届けておられます。

私の名前を付けた父親は、戦死して今年で 77 年。ウクライナの停戦を毎日祈り、緑の地球ネットワークの植樹活動のように、息長く、地道に、草の根交流の出合いの輪を拡げる大切さを痛感している毎日です。

新世話人のご紹介

前号の総会のご報告でお伝えしましたが、6月の総会で新しく3名の世話人が加わりました。世話人就任にあたり、メッセージをいただきましたのでご紹介いたします。



小倉亜沙美さん

高専の学生だった 20 歳の時に環境サークルの先生の紹介で GEN に加入し、その後広島大学に編入学し川の水質の研究で 2009 年に博士(学術)を取得しました。その後、国際理解や平和構築に関する教育・研究を行っています。専門は環境平和学です。

櫻谷し乃さん

小売業を営むイオンリテールの労働組合で専従役員をしています。2015 年に GEN の活動に参加しました。変えたいという熱意、地道に継続すること、共感、文化、人の温かみ、初体験で得た思い出です。組合員の気づきにつながる活動にしていきたいです。よろしくお祈りします。



弘世裕一朗さん

THE SUNTORY UNION の弘世裕一朗と申します。健康食品事業⇒酒類営業企画(東北)⇒組合本部と少し変わったキャリアですが、多様な経験をさせていただいております。みなさまとの交流を楽しみにしております。



インターン生のご紹介

GEN では 8 月～9 月の期間、インターン生を受け入れています。オンラインのみの活動ですが積極的に取り組んでくれています。



インターン生としてお世話になっている、関西学院大学建築学部 1 年生の阿部萌栄香です。

これまでのインターン期間で、環境問題にも様々な側面があり、解決は一筋縄ではいかないということがわかりました。その中で 30 年緑化活動を続けてこられた GEN の信念に共感し、より多くの人に知ってもらいたいと思いました。環境保全を実現してきた GEN での学びは大学の授業では得られないもので、とても興味深いです。残りのインターン期間でもあらゆることを吸収し、将来的には、環境に配慮された需要のある建物を造れるよう、GEN での経験を活かします。

短い期間ではありますが、どうぞよろしくお願い致します。

黄土高原紀行 <10>

三、河は水なく、山に樹を見ず (1)

谷口 義介 (GEN 会員)

20 日(火)、8 時すぎ、渾源県の懸空寺にむけ出発。

大同の市街地をぬけ、しばらく東南に走って、桑乾河にかかる古(固)定橋を渡る。

桑乾河は全長 500 キロ、山西省の北西部に源を発し、東北流して大同・泥家湾・涿鹿という三つの盆地をつらぬき、河北省に入って張家口の南西で永定河(盧溝河)と接続する。北魏のとき書かれた地理書『水経注』によると、これら三つの盆地には流れ込む小河川が多く、沼沢・湧泉が集中しているため、桑乾河の水量は豊かだった、という。

ところが、明末のころ、「氾濫の災なく、また灌輸の利に乏し」いので、古定橋より下流を浚渫すべし、と或る役人が上奏したというから(『明史』河渠志)、桑乾河の水はしだいに減ってきたようだ。

桑乾河といえば丁玲(1904～86)の小説『太陽は桑乾河を照らす』が有名だが、そのなかに或る男が「ズボンをまくり上げて、たったいま桑乾河の水を渡ってきた」、という描写がある。馬車で河に乗り入れる場面も出てくる。1948 年に記された「著者のまえがき」によると、小説の舞台は張家口の南西の涿鹿県だということから、このころ桑乾河の下流あたりは水が浅かった、と判断してよいだろう。

そして、私たちが橋を渡った 2002 年 8 月 20 日、桑乾河には白々とした川底に黒ずんだ水溜りが残る程度で、一筋の流れも見ることではできなかった。

そもそも、桑乾河で最後に流れらしいものが実見されたのは 5 年まえの 1997 年のことらしく、古定橋から眺めたところ、近くの農民がヒツジの群れを濁水に追い込んで、体を洗わせていたという(高見邦雄氏による)。年間降雨量が 400～500 ミリと少ないうえ、近年では野菜畑を灌漑するための井戸水の汲み上げが、地下水帯でつながっている桑乾河を水涸れさせる結果をまねいている。石炭採掘や火力発電のための地下水の過剰汲み上げも、原因の

一つらしい。

山西省全体でみても、2000 年夏、半数以上の河川が涸れ、27 の大・中型ダムと 560 の小型ダムから水が消えた、という。降雨量自体も極端に少なく、01 年には 100 年に一度の大旱魃だったらしい。

バスはさらに恒山の麓の懸空寺にむかってひた走り、途中、渾河にぶつかったところで小休止。眼前に、典型的な黄土高原の村(写真)。

渾河は桑乾河の支流で、ここにも水はない。広い川底にヒツジの群れが分かれて 2 グループ。農村では、だいたい 1 戸がヒツジを 5 匹くらい所有していて、朝になると羊飼いが集めにまわって草地につれてゆき、夕方各戸に返して、いくらかの報酬をもらう、とう仕組みになっている。この場合、数十匹ずつ 2 グループだから羊飼いが 2 人はいるはずだが、姿が見当たらない。どこかでさぼっているのか。

川原石をセメントで固め、護岸工事はしっかりやっている感じ。これは 7～8 月にときおり起こる鉄砲水に備えてのものだ。高台に村の広場があり、7～8 人の子供たちがしゃがんで、先生らしい人を囲んでいる。

その広場から河原に下りる階段があり、その道は川底の

井戸に続いているようだ(写真は次回掲載)。

民家は泥壁造り。冬暖かく、夏は涼しい。乾燥地帯だから土壁でじゅうぶんだが、たまたま豪雨があると、水が壁にしみ込んだり、天井が崩れることもある。窑洞(洞穴)は不衛生とかで政府により禁止、いまは物置として使っているらしい。

高台の下の狭い空間を利用して、トウモロコシと野菜を植えている。

民家のあいだに、ところどころ喬木が見えるが、村の背後は山の頂まで伐採し、畑にしている。

遠景の山は高氏山か。巉々たる岩山で、そこまではさすがに耕作しているようには見えない。

高い鉄塔は電波塔だろうか。寺廟や古塔が見えないのは、この村が平野部の本村から分かれた比較的新しい成立だからか。



万年中国語学習者のつぶやき

だいぶ前の中国語検定で胸に突き刺さった問題があります。中国語に訳せという問題の文章で、正確に思い出せませんが「中国語の勉強を始めて 10 年以上経ったところから何年勉強してるのかと聞かれるたびに口を開かずようになつた」という内容でした。読んだと

きに「自分のことじゃないか!」と打ちひしがれたことを今でも記憶しています。

ゴールがわからずにだらだらと学習を続けて幾星霜。その間費やした時間、テキスト代等は自分の糧となっているのか、それとも無駄遣いをしたのかわかりませんが、新たな単語や表現が発生し続ける言語学習の楽しさは今も健在です。(河本)



情報ひろば
いっしょなかたち

日中国交正常化 50 周年記念
中国文化財返還運動大阪集会

痛恨の歴史をこれ以上繰り返さない。草の根の力で中国文化財返還運動を続けている大阪城狛犬会の報告と講演です。

- 日時：9月24日（土）13時30分～16時30分（13時開場）
- 会場：難波市民学習センター講堂（大阪メトロ/JR「難波」駅下車、OCAT4階）
- 内容：講演「日中国交正常化 50 周年に思う」浅井基文さん（元外交官・東京大学教授、広島市立大学広島平和研究所所長等歴任）／報告「中国文化財返還運動とは」大阪城狛犬会
- 資料代：1,000円
- 主催・申込：日中国交正常化 50 周年記念・中国文化財返還運動大阪集会実行委員会 090-4640-7638（伊関）

中国研究所×笹川平和財団
「日中国交正常化」

50 周年記念連続講演会第 3 回
歴史の中の日中 50 年
1972 体制を考える

1972 年の日中国交正常化により形成された「1972 年体制」はこの 50 年でど

* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月 15 日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

う機能し、どんな課題があるのか、現在地と今後の方向性について研究者が考察し、議論します。

- 日時：9月25日（日）17時～19時
- 手段：オンライン配信（Zoom ウェビナー）
- 基調講演：高原明生さん（東京大学教授）
- 登壇者：井上正也さん（慶應義塾大学教授）、福田円さん（法政大学教授）、江藤名保子さん（学習院大学教授）司会：村田雄二郎さん（中国研究所常務理事・同志社大学教授）
- 参加費：無料
- 定員：1,000名
- 申込：9月22日正午までに申込フォーム（https://f.msgs.jp/webapp/form/19951_jndb_724/index.do）よりお申込みください。
- 問合せ：（一社）中国研究所（東京都文京区大塚 6-22-18 tel. 03-3947-8029 fax. 03-3947-8039 e-mail : c-chuken@tcn-catv.ne.jp URL <https://www.institute-of-chinese-affairs.com>）

力、社会貢献活動、SDGs などに取り組む団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントです。今年は会場とオンラインのハイブリッドで開催し、出展者による展示・報告や体験イベントなどをおこないます。

- 日時：10月1日（土）、10月2日（日）10時～17時
- 会場：東京国際フォーラムホール E2 / ロビーギャラリー（東京都千代田区丸の内 3-5-1 JR「有楽町」駅より徒歩 1 分）※来場人数により人数を制限する場合があります。
- オンライン会場：グローバルフェスタ JAPAN のホームページ（URL <https://www.gfjapan2022.jp/>）より主催者が用意する Zoom の URL にアクセスし、オンラインコンテンツや配信プログラムにご参加ください。
- 参加費：無料 事前のエントリー不要。どなたでもご参加いただけます。
- 主催・問合せ：グローバルフェスタ JAPAN2022 実行委員会（e-mail : globalfesta_info@plan-sms.co.jp）
- 共催：外務省、独立行政法人 国際協力機構（JICA）、特定非営利活動法人 国際協力 NGO センター（JANIC）

グローバルフェスタ
JAPAN 2022
リアル & オンライン

グローバルフェスタ JAPAN は国際協

